

発刊の辞

國學院大學文学部教授 博士 (歴史学) 青木 豊 81期史



本誌は、國學院大學博物館学講座開講 50 年を記念して、院友の現職にある学芸員及び博物館関連機関の研究者間の連絡情報誌としての役目と、これから学芸員を志す学生諸君の道標となることを目的とし、昨年 3 月に創刊したもので、本誌は No, 2 として発刊するものであります。

今回も多数の国公立、私立の博物館及び関連研究機関に所属されている院友学芸員から、 御多忙中にもかかわらず玉稿を頂戴することが出来ました。この場を借りて、厚く御礼申 し上げる次第であります。

さて、本学は全国に先駆けて平成9年に博物館学専攻の大学院を設けており、当該大学院への進学者は増加の一途を辿って居ります。現在、博士課程前期・後期合わせて15名が在籍し、平成21年度は秋季入試のみでも博士課程前期に5名、後期に1名の入学者が決定して居り、来年度は総数20名を凌駕する見通しであります。

一方、学部受講生の来年時3年生は、通年よりも3割方多く190余名を数えて居ります。 ご承知の「博物館実習Ⅲ」の地域博物館見学実習(3泊4日)は、年間6回を予定して居りますが、それでも一回の参加が35名と、受け入れ見学館側からすれば常識を逸脱した大人数となり、苦慮している次第であります。

このように博物館学課程受講生と博物館学専攻生が増加する中にあっても、未だ博物館学の専任教員は1名であり、孤軍奮闘といった状況でありますが、博物館学のそれぞれの部門を専門とする多数の講師の先生方に支えられて邁進して居ります。

また、本学の制度でありますゲスト講師制度を利用して、学部、大学院生を対象に更なる博物館学の知識の教授を目的に、4時間余りの集中授業を前・後期合わせて2度実施して居ります。本年は、前期に日本大学の伊東孝教授による「近代遺産と博物館」を、後期には院友であり、博物館史・博物館学史の泰斗であられる聖徳大学の椎名仙卓先生に「日本博物館学史」を講じて戴きました。

就職に関しましては、団塊の世代の退職者の補充が一部にはじまったようで、既に数名が志を果たして居ります。専門領域では、考古学が激減し、美術史を専門とする美術館学芸員の求人が増加している傾向が認められます。しかし、本学では哲学科がありながらも応募者が居ないのが実状でありましたが、今年なども哲学科を卒業して博物館学専攻で大学院への進学者も増加して居りますので、是非とも就職に関しましても諸先輩方の御助力・御協力の程を伏してお願い申し上げます。

学芸員を志す学生へ

東京国立博物館上席研究員 原田 一 敏 (はらだ かずとし) 81 期史

私が東京国立博物館に勤務するようになって30年が 経とうとしています。博物館という事業の現場で、こ れまで多くの展覧会にかかわってきました。特別展は 博物館に最も多くの観覧者が訪れるという機会であり、 学芸員にとっても、自分の研究の成果を発表する場と して、観覧者の反応や他館の学芸員や研究者の批評に ついては気がかかるものです。自分の企画した展覧会 に多くの人々が訪れ、満足をしていただいている様子 を見ると嬉しいですし、学芸員冥利につきるといえま す。学芸員を志す学生も、また一般の人々も博物館と いうと、このような特別展を行うことをイメージする ことが多いようです。たしかに新国立美術館や森美術 館など、最近は収蔵品を持たず、企画特別展だけを行 うところも出てきています。しかし、博物館は特別展 だけを行う所だけではないということは言うまでもあ りません。

博物館、とくに人文系の博物館の使命は、私たちの 先人の生活文化や現在の人々の芸術文化活動の成果を 収集、保管し、それを研究し、展観することによって、 人々が育んできた文化を知ってもらい、保存、修復を して後世の人々に伝えることです。実は、日常の仕事 は特別展よりも、こうした地道な作業をしていること の方がはるかに多いのです。文化財を守り、保存して いくことはかなり大変なことです。私は國學院大學の 博物館講座で、博物館実習Ⅳの手伝いをしており、と くに学芸員として備えなければならない基本的な作品 の取り扱い方、調書の取り方、梱包の方法などを教え ています。作品を扱う作業をするときは、まず手を洗い、 時計を外し、ネクタイを取り、そして調書を書くとき は鉛筆だけしか使わない。こうしたことは、学芸員と して常識のことですが、意外なことに大学では教えて くれません。そうした細かな注意は、いかに作品を安 全に扱うかということのためです。展示替、購入、寄 託の受け入れ、作品の貸出、返却、写真撮影、他の研 究者への熟覧調査の立ち会いなど、作品に触れること



は実に多いものです。展示替では1日に多くの作品を 入れ替えし、それぞれの収納箱に収めて、収蔵庫に所 定の場所に戻します。ともすれば、面倒臭いと思いが ちですが、保存のためには、そうしなければならない のです。私たち学芸員は、つぎの世代に文化財を届け るという使命を担っているのです。

日本の学芸員ほど忙しいところは他国にもないでしょう。欧米の大きな博物館、美術館では、収蔵庫管理、展示、研究、保存修復にそれぞれの専門の職員がいて、学芸員(CURATOR)といえば、研究者を指すことが多く、私の知人の大英博物館やメトロポリタン美術館のCURATORは、作品の日常的な管理はしますが、研究が主体となっています。韓国の国立中央博物館は学芸部、遺物管理部、保存修復部と組織として分けています。

日本の学芸員は雑芸員といわれるほど多くの仕事をしなければなりません。本誌の創刊号で、東海市立平洲記念館の立松彰氏が、「学芸員よ雑芸員をめざせ」、といっておられますが、私もそれとは内容は異なりますが、作品のコンディションをもっとも把握しているのは常に作品を扱っている学芸員なのです。この日本的な学芸員制度は結構機能しています。研究と、作品の取り扱いのプロとしての雑芸員になってもらうことを願っています。学芸員としてその仕事に就ける期間は30年から35年、文化財を次の世代に無事に引き継ぐことこそ、最も大切な仕事と考えています。



筆者企画の特集陳列「自在置物」

ミュージアムの世紀に向かって

長崎県美術館館長 耕司(よねだ こうじ) 米田 78 期史

はじめに

縁あって一昨年(2007年)4月、開館1年11ヶ月の長崎県美 術館の二代目館長に就任しました。長崎市出島町にある長崎県美 術館は、長崎水辺の森公園に隣接し、開放的な港町と一体となり 開かれたガラス張りの建築で、光あふれる美術館です。文化拠点 として市民の多様な生活に溶け込む憩いの広場、心のオアシスで ありたい。文化芸術による町づくり・地域振興に貢献したいと願 い諸事業とに取り組んでいます。設立時のコンセプトである「呼 吸する美術館」を発展させ、「いのちが巡り、血がかよう美術館」 として、楽しい美術館づくりに邁進しています。展示公開だけで なく、「参加・体験」を重視した「第三世代の美術館」を目指して、 市民と一緒に美術館づくりを行っています。

ミュージアムの世紀へ

経済と文化は国が栄える車の両輪です。経済の発展には文化が 必要です。文化の方も経済に貢献することで基盤が強化されると いう相互関係で、経営の立場からからは、ミュージアムは市民社 会を変革する起爆剤だという意見もあります。「21世紀は文化と 経済の世紀」「文化芸術と情報の世紀」とも言われるように、今 や文化と経済は相互に依存し合う時代に入りました。21世紀は 「知価社会」と呼ばれ、革新的情報が経済を活性化するといわれ ます。創造性豊かな人材の養成がその繁栄のカギになります。文 化への投資、都市の競争力を培うことは、困難な時代を生き抜く ための基礎体力です。ヨーロッパでは文化が、国家が生き残るた めの重要なアイテムになっています。21世紀はロンドン、ニュー ヨーク、東京などの政治・経済中心都市の時代から文化芸術によ る地方都市が主力となる創造都市の時代に向かっています。

しかし現在は「文化芸術冬の時代、氷河期」などと称される逆 風にあります。さらに昨今のリーマン・ブラザースの破綻に端を 発するアメリカ発の経済不況は世界中に深刻な影響を与えてお り、わが国にも深刻な影響が出ています。1929年の世界恐慌以 来80年振りという歴史的な事件です。2005年11月3日に、当 時の東京芸術大学学長平山郁夫さん、大原美術館館長の高階秀爾 さんが呼びかけ人となり、「効率性追求による文化芸術の衰退を 危惧する」という声明を発表しました。この声明に38名人が賛 同しました。その中には元文部大臣の有馬朗人さん、文化庁長官 の三浦朱門さんをはじめ、各界の文化人が署名しておられます。 優れた文化芸術を創造し、継承・発展していくことが、世界に 誇れる品格のある国づくりにつながるものだという内容でした。 ミュージアムなどの文化芸術活動は、社会に生きる力を与えるも



のです。機能一辺倒ではなく、人生を楽しむゆとりです。芸術文 化冬の時代とか氷河期と言われる中、この声明で一定の抑止力が 働いたのでした。

美術の力

全国美術館会議の学芸員研修のシンポジウムをした時のことで す。大原美術館の副館長さんから伺った話です。10年前に自殺 しようと思って倉敷にやってきた男性が、死ぬ前に大原美術館に 入館し、関根正二作「信仰の悲しみ」という絵を見て、すごく感 動した。死ぬのを止めて、もう一度生きてみようと思い、故郷に 帰ったそうです。そして10年間、生活のため、生きるためにが んばって働いた。そして、なんとか自立できるようになって、10 年たった。もう一度あの絵に会いたい、と思って再び大原美術館 に来た方がいたという実話でした。一枚の絵がもつ生命力が、あ る時すごい力を発揮するものだと再認識。たった一例でも、実際 に、自殺から人を救ったという実例があったということは、きっ と実態はその何倍もあったと思っていたら、全国の美術館会議仲 間たちからもこの話のような例が数々寄せられました。

今、子どもたちが大変です。文部科学省は、今日的課題として、 「子どもたちに生きる力を」と言っています。その生きる力を生 み出す内容は三つあります。まず「腹の足しになること」、次に 「体の足しになること」、そして、三つ目はそのどちらでもないけ れど「心の足しになること」なのです。お金がなくても苦しくて もがんばれる心の勇気を与えてくれるのが、芸術だと思うのです。 ここに深く関わっているのがミュージアムです。

おわりに (スリー・オー)

いつの時代でも、優れた美術館職員には「スリー・オー」があ りました。() (オー) で始まる言葉です。これまで多くの素晴ら しい先達にはこの3つがありました。

- ①「おちょこちょい」。 どんなに博物館冬の時代でも未来に希 望をもって取り組む。
- ②「おせっかい」。どんなに面倒でも教育普及活動などに熱心 に取り組む。
- ③「おひとよし」。どんなに遅くなっても市民のために献身的 に仕事と取り組む。

新たな一歩を踏み出した「院友学芸員」に「老幹新枝」の言葉 を贈ります。大学の伝統と博物館学の創造を。さらに新しい枝を 伸ばす活力に期待いたしております。今後の 「博物館学講座」 の枝に大輪の花が一杯咲いている姿を想いながら。

博物館と国際交流

石川県立歴史博物館総括学芸主幹 高橋裕(たかはしゆたか) 80期史

1990 (平成2) 年10月6日石川県立歴史博物館が全館 完成しました。歴史博物館は、戦前の旧陸軍第九師団兵 器支廠兵器庫として明治42年から大正3年にかけて建て られた赤煉瓦棟3棟を再生して、新たに県立歴史博物館 として甦らせたものです。これを記念して特別展「魅惑 の日本海文化」(H2.10.6~11.11) 展が開催され、石川県 としては初めて韓国国立中央博物館を通じて韓国の考古 資料 27 点を借用しました。展覧会終了後、韓国国立中央 博物館との仲介をしていただいた当時の駐日韓国大使館 文化公使鄭亨寿氏から"一度限りの交流では本当の日韓 交流は出来ない、これを期に石川県の博物館と韓国の博 物館が末永く交流できるようなシステムをつくたらどう か"との提案があり、韓国国立中央博物館韓炳三館長の 支援の下、日韓の友好親善と両国の博物館活動の充実、 環日本海文化研究の促進を図るため、韓国全羅北道に新 設された国立全州博物館との姉妹館交流が実現する事に なりました。

韓国国立全州博物館は、当館と同じく1990年10月に考古・歴史・民俗を中心とした全羅北道地域の歴史と文化を展示する博物館として新設されました。全州市は金沢市と同じく古くからの歴史を持つ街で、日本文化に大きな影響を与えた百済文化の故地でもあります。また石川県は古来から韓半島との交流の拠点でもあり、こうした共通点の上に立ち両館が共に手を結び、協力する事は日韓友好親善と地域文化の発展に大きく貢献するものであるとの共通認識の下、1991(平成3)年1月18日に石川県立歴史博物館において姉妹館協約書に調印し、両国にとって初めての国際姉妹館交流を始めることとなりました。

交流の大きな柱として、学芸員の交流、所蔵資料の相 互展示事業、地域の文化交流を実施する事となり、平成3 年から平成20年まで次の事業が実施されました。

- (1) 平成3年より資料の相互交換展示事業を開始。
- (2) 平成3年より学芸職員の相互交流研修事業を開始。 (平成20年度まで石川県13名 韓国18名が相互 交流)
- (3) 平成3年より交流研修員を講師として日韓歴史文 化セミナーを開始。
- (4) 平成3年11月石川県で日韓国際シンポジュウム「東



アジアをめぐる古代仏教文化」を開催。

- (5) 平成9年韓国国立全州博物館で古代祭祀遺跡に関する国際シンポジュウムが開催。
- (6) 平成8年10月日韓姉妹館交流5周年を記念し、石 川県立歴史博物館で「波濤をこえて-古代・中世の 東アジア交流」展を開催。
- (7) 平成13年8月韓国国立全州博物館で姉妹館交流10 周年を記念し「土と命-韓日古代交流の軌跡」展が 開催。同時に韓日古代交流に関する国際シンポジュ ウムも開催。
- (8) 平成13年9月石川県で姉妹館交流10周年を記念し、「飛鳥の王権とカガの渡来人」と題する国際シンポジュウムを開催。韓国側から講師2名が参加。
- (9) 平成 18 年 10 月石川県で姉妹館交流 15 周年を記念 し「韓国文化への誘い-全羅北道の歴史と文化-」 点を開催。同時に韓国側講師を招き国際講演会を実 施。
- (10) 展示図録及び国際シンポジュウムの報告書等を刊行。

20年に及ぶ姉妹館関係が継続した例はこれまでにもなく、韓国の国立博物館すべてに石川県へ留学した経験者が配置され、相互の情報交換にも大きな成果を挙げています。また、2011年度には交流 20周年を記念して全州博物館で「石川の文化財」展を開催すべく準備をしています。日韓双方には歴史認識問題等種々の懸案がありますが、両博物館のこのような交流によって、地域が発信する真の友好親善が図られるものと確信しています。



韓国国立全州博物館を視察する筆者(後列右から3人目)

二度の震災に遭遇して - 博物館は人の心を守る -

新潟県立歴史博物館主任研究員 山本哲也(やまもと てつや) 94期史

平成16年10月23日に新潟県中越大震災が発生(最大震度7)、そして平成19年7月16日には新潟県中越沖地震が発生した(最大震度6強)。私の勤務する新潟県立歴史博物館がある新潟県中越地方は、3年間で2度の大地震に見舞われ、それぞれでそれ相応の被害を受けた。まさかと思いつつも、日本が地震大国であることを肌で感じ、また、いかに災害に備えることが必要か実感した。

地震後、各地の復旧作業などを目の当たりにしながら考えたのは、被災者の"心の足し"になる活動が博物館にはできるのかどうかということだった。院友の大先輩学芸員である米田耕司さん(千葉県立美術館館長から現在は長崎県美術館館長)の言葉が蘇ったのである。「人間には生きていくために必要なものが3つある。一つ目は"腹の足し"になるもの、二つ目は"体の足し"になるもの、そして三つ目は"心の足し"になるものであり、博物館・美術館は"心の足し"を満たす活動をしなければならない。」という言葉が。

その言葉に従うように、震災復興を支援する事業をとにかく考え始めたのだが、そこで出たアイディアが、山古志の風景も描いている画家の原田泰治さんの「日本の原風景」作品などを見てもらう復興支援展覧会であった。それは、震災によるギスギスした心を和らげ、多くの被災者の"心の足し"になると考えたのである。そして友の会会長の全面的なバックアップを得て、震災から半年経たない中で開催することとなった。その結果、たくさんの被災者、特に全村避難した山古志の方々の"心の足し"になり得たとの感触を受けることができた。私自身にとっては、災害時に限らず、博物館は"心の足し"になる活動ができるとの確信を持つに至る結果ともなった。

ところで、不謹慎な言い方に聞こえるかもしれないが、中越大 震災の後、私は「このような大きな地震の時には土器の一個や二 個、壊れるくらいの方が、もしかしたらいいのかもしれない。」 と言っている。それは何故か。震度7の地震が起こると、残念な がら街は壊滅的な打撃を受ける。そして、残念なことに少なから



博物館の土器の被災状況(写真提供:新潟県立歴史博物館)



ず人は死んでしまうのである。だから、人もモノも文化も一緒に 復興する。それが本当の街の復興だと思う。しかし、それをよそ に草大なお金をかけて文化財を守るのであれば、そのお金を絶対 に崩れない道路を作ってほしいというのが一般市民の感情である だろう。怖いのは火や水の災害である。土器は壊れても直るのだ。 文書も焼けさえしなければ千年以上の伝統を持つ装こう技術(裏 打ち)で直るではないか。もちろん、壊れない、裂けない方がい いに決まっている。そのためにできる必要なことはできる範囲で やるべきである。しかし、莫大な投資をして、文化財を守るとい う姿勢を示しているだけでは、文化や文化財は逆に見放される、 「そんな文化はいらない」と言われてしまうと確信するのである。 多くの批判を受ける覚悟で、各地でこの話をしているのだが、賛 同の意見も受けるかたわら、批判もある。文化財を守ることので きる人間はごくわずかしかいないのだから、その文化財をやる人 間がそんな言い方をしてはいけないという意見もあった。しかし、 それでは文化財が文化財をやる人間だけのものになってしまう。 やはり人あっての文化財でなければならない。本当は何が大事か と言うと、壊れてもいいと言うことではなく、何にどれだけ手を 施すかのバランス感覚を持つことなのだ。人がいなくなっても、 文化財だけは残る。そんな文化財では意味がないのだから。しか し、敢えて極端な話をして、いろいろと考えてもらいたいと、そ のような話をし続けているのである。

博物館は文化に関わる仕事であるのはもちろんだが、それは単に文化財に関わるということではなく、人の心に関わる仕事であるはずだ。そのために何を考えるべきか、2度の震災は、私に大きなヒントを与えてくれた。

人の心に届く仕事をするにはどうすべきか、そしてその仕事は どうあるべきか。以上の話からは、決して結論など出せないだろ うが、後輩たちにはいろいろと思いを巡らせるためのきっかけと して、是非とも受けとってほしいと願っている。



展覧会の様子(写真提供:新潟県立歴史博物館)

博物館をめぐる状況と展望

相模原市立博物館長 大 貫 英 明 (おおぬき ひであき) 81期史

バブル経済の終焉とともに、全国の文化施設の建設ラッシュは 終了した。そしてバブル期に建設された大規模博物館をはじめ、 多くの公共施設の維持管理費は、自治体の財政を圧迫し、その改 革が迫られている。

残念ながら学芸員の世界では、教員や警察官に見られる団塊の 世代の補充を目的とした採用は控えられ、臨時職員や退職者の再 雇用によって補填される例が多い。

明治 100 年、市制 50 年といった周年事業で博物館や美術館が 乱立した時期に就職できた私たち世代に比べ、諸君が置かれてい る状況は、まさに世代間格差と表現せざるを得ない状況にある。

博物館の統廃合にあたって、保育園で起きた反対運動が博物館で起きなかった責任は、博物館にあるとした先輩学芸員の言葉は至言である。住民に親しまれ無くてはならない存在と認識されなかった責任は、われわれ世代の博物館人の責任であり、その結果が諸君に襲い掛かっていると言っても過言でない。

バブル期以降生まれた多くの博物館・美術館は、教育機関として教育委員会が管理することはない。公設民営、つまり建物は作るが職員は公務員としない財団委託で、財団の学芸員は不安定な雇用下におかれている。さらに地方自治体の財政再建、民間企業への仕事の分配という経済政策で打ち出された指定管理者制度は、財団職員の雇用をさらに不安定なものとしつつある。

こうした状況は、博物館・美術館に限らず、図書館や他の社会教育施設にも及んでいる。学芸員を目指す諸君をめぐる状況は、決して明るいものではない。しかし一方では、衆参両院における「社会教育法などの一部を改正する法律に対する附帯決議」に、「国民の生涯にわたる学習活動を支援し、学習需要の増加に応えていくために、公民館、図書館及び博物館等の社会教育施設における人材確保およびその在り方について、指定管理者制度の導入による弊害についても十分配慮し、検討すること。」が盛り込まれた。

国と自治体が生み出した天文学的数字と言うべき財政赤字の問題を、自由で競争原理が働く社会の実現によって打開しようとする論理は、諸君もご承知のとおりアメリカ合衆国のサブ・プライムローンの問題で崩壊した。すべての価値観を市場に委ねる市場優先主義は、貧富の格差の拡大という社会問題を生み、学校教育の改革とともに公的社会教育としての博物館の役割にも目が向けられつつある。

これまで有料とされていた国立博物館・美術館も、青少年にとって重要な公的社会教育として、常設展の高校生以下の無料化が進んでいる。自治体も独自に高校生以下あるいは中学生以下の観覧無料を進めている。



「冬来たりなば、春遠からじ」のたとえは、まさに諸君らをめ ぐる状況である。じっくりとチャンスをうかがい、チャンスを生 かすことのできる実力と、他人の意見を素直に聞くことのできる 修行にいそしんで欲しい。

学芸の仕事で生きる糧を得るとするなら、このくらいで良いとするいい加減な気持ちで仕事をしては、先輩諸氏と同じ結果を招く。常に全力でぶつかり、決して言い訳をせず、誤りは素直にわび、誤解には相手が理解できるよう論理的に説明できる力をつけることである。

自治体は、生き残りゲームのさなかにある。住民に魅力ある街づくりには、戦略として博物館や美術館の需要はまだまだある。





総合学習での学校支援

地域への仕掛け人

利尻町立博物館学芸課長 西谷 榮治(にしや えいじ) 85期史

「利尻の語り 216 慰安倶楽部新生劇団」を書き終えた。掲載は利尻町役場広報誌『広報りしり』 428 号で平成 21 年 (2009 年) 1月に発行される。慰安倶楽部新生劇団とは昭和 22 年 1月 3 日に小学校体育館で行われた地域の劇団公演の記念写真である。写真の聞き取り調査を終え、語り口調で物語として著す。

さて、こうした利尻の語りは216回目を迎えた。始まりは『広 報りしり』184号(昭和61年7月号)である。平成4年(1992 年) 4月から翌5年3月まで休んだだけで、それ以降連載を続け ている。元の始まりは「りしりの博物誌」(昭和58年4月号)で あった。博物館所蔵資料や調査研究成果の報告であった。「りし りの博物誌」から「利尻の語り」に換えたのは博物館から出す情 報がより多くの人たちに親しまれるためである。「りしりの博物 誌」は展示テーマに沿っての解説だった。町民に出会う度に掲載 内容について話題提供しても反応がいまいちだった。むしろ難し いという感想が伝わってきた。そこで記述スタイルを語り口調に 換えてみた。取り扱う内容も展示・資料解説ではなく利尻島の年 中行事、記念碑・石碑、集落や博物館所蔵資料の話題などを写真 と組み合わせてみた。取り上げる話題をもっともよく知っていそ うな人の調査。資料情報と聞き取りたい項目を事前に提供する。 こうして聞き取り調査。原稿を書き上げた時点で、語ってくれた 人への確認。それが終わって町役場の広報りしり編集担当者に提 出。連載始めて利尻の語りへの関心が高まってきたことを感じる ようになったのは、歴史写真の語り形式である。広報りしりが配 られるとまず写真を見る。その後で語りを読む。話題に関わる地 域の人たちが集まると、語り合ったり補足説明が交わされる。こ うした手応えを感じてから広報りしりが発行されると、利尻の語 り頁と掲載写真を拡大印刷して、利尻島国保中央病院、利尻町特 別養護老人ホーム、利尻町触れあい保養センターなど町の施設に 展示するようにした。聞き取り調査に行くと、展示パネルをよく 見ていること、親しい人たちで話題を交わしていること、語りの 人と出会ったときに声を掛け合うことなどが、伝わってくるよう になった。

こうして 216 回続いた利尻の語り。一枚の写真に盛り込まれている情報を残すために始めた作業。町の人たちが、今度はどんな写真と話題が載っているのだろうかと広報りしりが届くのは待っているとのこと。利尻の語りを通じて博物館・学芸員と町の人たちが繋がっていること。博物館として地域の歴史を残すことだけでなく、地域の人たちに話題となる出来事の場をつくること。特に高齢者が多くなっているなかでも、その人達の記憶を蘇らせて、元気を醸し出すことができるのであれば、博物館が成り立つ地域



にどう関わっていくのかが見えてくる。現在は年六回発行の広報りしり。平成16年まで毎月発行されていた。年12回の取材と執筆。取り上げようとする写真や語り手が締め切り間際まで見つからなかったことや書き上げた内容の了解作業で何度も書き換えたことなどがあった。216回連載したなかで、これからも続けていくことは博物館が成り立つ地域の人々への楽しみと活力を与えるための地域への仕掛けであるとしている。学芸員は地域への仕掛け人としてあることも大事なことであると感じ、いつも原稿を書いている。





*神社。の博物館から

出雲大社権宮司 千家 和比古(せんげ よしひこ) 81期史・83期修文

この列島に生まれ生きた人々がその精神構造の中に自覚的・無自覚的に "相対性、を基層としてきた歴史事実は、なお重いものがあると理解します。むしろ、"発展の限界、が世界的・複相的に周知される今日的状況下において、相対的枠組みによる思考形態は意味価値を増しつつあると基本評価しています。この相対性を具現した文化を歴史的に担ってきた一つに神社があります。

こうした神社に附設された博物館の目的意図は、申すまでもなく先ずは神社・御祭神の理解を求め深めるところにあります。しかしながら、神社の鎮座空間は祭祀の場を中核としつつ内包する自然の杜、そこに営む様々な生き物などを含めて目に見えるもの・目に見えないもの、人工・非人工の複合的営みの総合の空間です。このように多様多相の意味的場として神社を捉えますと、鎮座空間は人間文化、またそれを取り巻くものの総合する *体験学習、の場空間を形成するものであり、神社の博物館そのものはその一部を構成する施設と位置づけられます。

出雲大社において、所蔵の宝物類を一般の観覧に供することが具体的に知られるのは近世期以来のことです。今日的常設展示ではありませんが、参詣の方の拝礼に際して御本殿内などに納められていた宝物を移し出し、御本殿大床、庁舎などで拝観が扱われました。けして〝秘蔵〟ではありませんでした。

やがて明治六年、前年に出雲大社の大宮司となった千家 尊福は、収蔵品の一般公開により出雲大社について広く理 解を深める場の必要性を認識し、神社のみならず国造家、 社家の所蔵品などを展示して広く一般に供する「博覧会」 を企画し、庁舎を会場に二十日間にわたり開催しました。 当時は神社改正で国家管理となりそれまでの多くの社家に よる奉仕体制は崩壊していましたが、旧社家の協力も得て 実施されたものです。期間限定でしたが、時代的に画期的 な企画でした。この博覧会が直ちに常設展示施設の開設に 結実することはありませんでしたがこうした企画は以後も 散見し、常設展示への胎動です。そして明治四十五年に念 願の宝物館建設の政府認可を得、大正三年に木造二階建の 宝物展示の専門館である「彰古館」を新造開館しました。 以来、この彰古館を含め現在三ヵ所の展示施設をもって展 示を行っていますが、今日的には様々な課題を抱えながら、 というのが現状です。



ところで古来、出雲大社はかの伊勢神宮と様々な場で対比的に語られます。そうした歴史伝統性ゆえに、多数のいわゆる宝物を収蔵していると思われがちでしょう。しかしながら、想像以上にそうした宝物は寡少です。ひとつの指標に国指定をみれば、国宝御本殿はともかく、国宝の手箱一個、重文の鎧一具・文書三巻・銅戈一本・硬玉勾玉一個・太刀一振です。来館された方は、恐らく拍子抜けされているのではないかと思うほどです。

過年、国立の博物館の某先生が来館の折にこのことをお話したことがあります。そのリアクションは、想定外の「むしろ、少なくて良い」でした。それは、それだけ民衆化していることの顕われでもある、という意図意味でした。いわゆる宝物的物的評価に拘泥するのではなく、神社総体を構成する一施設という思考枠組みに基本的に繋がるものと理解しています。神社に納められた収蔵品それぞれはけして単なる物理的存在ではなく記号物でもありません。それぞれに人間が有する相対的心的象徴性を内包したものです。その視点に立つとき、その象徴性に少なくとも物理的な優劣を論じる余地はないのです。

展示品それぞれが何を物語るか、何を意図し・何を意味し・何を価値としたか。日常性に生ずる "非日常性"、非日常性に見える "日常性"の展示こそ、課せられた神社の博物館の存在性でしょうか。広く "人間を知るための博物館"として、神社附設という環境特性を活かした博物館の在り方が問われていると痛感しています。



島根県立古代出雲歴史博物館での講演風景

袖摺り合うも多生の縁 ~三十年のご縁~

たばこと塩の博物館主席学芸員 岩崎 均史(いわさき ひとし)

2008年11月に、私の勤務するたばこと塩の博物館が開館三十 周年を迎えました。自分自身は、準備室から仕事をスタートさせ ていますので、職場より少し早く学芸員生活三十一年目に入って います。この間は、長いような、短かったような、どちらの思い も存在して三十年目を迎えた気持ちは、人生の半分以上にあたる ことでもあり、一言では語ることはできません。そんなことは、 今回求められた内容ではないと考え、ここでは、私の好きな言葉 であり、信条でもある「ご縁」、特に学芸員生活や博物館での仕 事における「ご縁」について記してみたいと思います。さっそく ですが、私は、『院友学芸員』の原稿を依頼されたことも「ご縁」 だと考えています。また、私と本稿の読者との縁も生じたことに なります。わたしの考える「ご縁」は、人との縁や、「もと」と の縁(美術史・文化史を専門とする学芸員ですから、作品・資料 との関係は豊富です) など、単なるコミュニケーションとは異な る「出会い」(人との出会い・ものとの出会い)といった繋がり になりましょうか。

さて、気がつけば、学芸員として働ける時間が、もう残り少な い立場になってしまいました。確かに体力的なことは、だんだん 自信がなくなってきていることも確かなようです。以前は、先 輩(國學院 OB に限らずです)だらけだったこの世界も、今では、 自分より若い学芸員さんの方が多くなっているのが現実です。そ んな私でも、新設館で新規採用の学芸員しかいなかった開館当時 は、右も左もわからないような状況でした。職場の中には、同時 に採用された同僚はいても、知識や経験は同程度であり、博物館 の仕事・学芸員の責務など分からないことばかりで、暗闇を手探 りで進んでいるようなものでした。そんな時期に、暖かく接して いただいた諸先輩の指導や助言は大変にありがたいものでした。 自分も含め、たばこと塩の博物館が今あるのも、そのお陰と、大 げさな表現ではなく、心底そう思っていて、これもそんな先輩達 との「ご縁」だったのですね。さらに遡れば、学生時代に学芸員 の「いろは」をご教授いただいた、樋口清之先生・加藤有次先生 との出会い・ご指導も「ご縁」であり、加藤先生の推薦を頂き、 現在の職場に就職できたのもこの「ご縁」があつたからこそでしょ う。学生時代間まで遡ったのですから、もう少しお話しすると、 私のクラスからは、学芸員になった者が三名います。これは、きっ と珍しいことではないかと思いますが、三井記念美術館の清水実・ 神奈川県立歴史博物館の薄井和男と私で、三名とも基本的には美 術史の学芸員として現在各組織の中枢を担っています。学部の一 年の時からお互いに、博物館に就職したいという夢を友人として 語り合い、揃って (就職時期はそれぞれ異なりますが) 実現でき



た仲間です。もちろん、現在でも、お互い連絡を取り、何かと協 力し合うという、心強い「ご縁」が続いています。

それから、私は、学芸員予備軍ともいえる学生諸君に博物館学 芸員講座の授業に出講するようになって二十年を超えています。 現在は、成城大学で21年目・学習院大学では4年目になります (この大学出講もご縁があってのことです)。ですから、博物館学 芸員を目指す学生さん達が、博物館や学芸員にどのような考えを 持っているかは身近に確認できます。大半の学生は「学芸員資格 は欲しい、しかし、就職することが難しいので、学芸員にはなら ない」と明言しています。もちろん学芸員になりたいので、講座 を受講している学生も少なくないのですが、アンケートを書かせ る・挙手させる・個別に意見を聞くなどを総括すると、年々、前 者の傾向が高まっているようです。

「学芸員は狭き門か?」という問題です。学芸員に採用される のは確かに大変ですし、難しいことでしょう。この現状を否定す ることはしませんが、でも一般の企業に就職するのでも、第一志 望の希望職種や会社にすんなり就職できる人も少ないと思いま す。だったら、博物館の学芸員を希望しても難しいというのと、 そんなに違いはないのではないでしょうか?私は、努力もリサー チもしないで、ギブアップするのは、何か違うような気がしてな りません。確かに、毎年同じ博物館が学芸員の募集をするという ことは、まずありませんが、日本全国まったくある年は学芸員の 募集がゼロということもないはずです。学芸員採用の門戸は、皆 さんが思うほど閉じてはいません。現在は、インターネットで、 学芸員の採用状況などをまとめて見ることのできる便利なサイト や、都道府県市町村の採用の有無も簡単に調べられる便利な時代 です。博物館学芸員だって、就職活動無しに就職できるわけはな いのですから、是非トライしてみてくださいな、機会を求めれば、 ご縁はあるはずです。博物館関係周辺の企業や職種も魅力あるも のですし、資格を持っていることが活かせるかも知れません。諦 めることは、直ぐにでもできるし簡単です。まずは、努力を惜し まないことが肝要だと思います。



「たばこと塩の博物館での講演会の様子」

「不易」と「流行」のバランスを

(株) 丹青研究所・文化空間情報開発研究部部長石川 貴 敏 (いしかわ たかとし) 99 期史

私は、昭和59年4月にディスプレイ業界初のシンクタンクとして設立された株式会社丹青研究所に勤務しています。私の部署では、8,000館以上に及ぶ、国内の博物館及び博物館類似施設(当研究所では意識的に博物館類似施設を広く捉えています)のデータを保有しており、情報誌「ミュージアム・データ」等を介した情報発信(http://www.museumdata.ne.jp)とともに、文部科学省や文化庁、財団法人日本博物館協会等からの委託・委嘱事業を担当しています。

現在は「冬の時代」と評される我が国の博物館ですが、今こそ学芸員を中心に博物館に関わる人々(地域住民、大学教員、学生、民間事業者、NPO関係者等)が協力・連携し、多くの人の知恵と工夫に支えられた博物館発の魅力的な事業を次々に展開する時であると考えています。

博物館の運営に関する調査を行うたびに、博物館を支えているのは間違いなく学芸員をはじめとした「人(材)」であり、我々民間企業と同様に博物館職員の「モチベーション」が施設の行く末を左右するのだと強く感じます。事実、魅力的な活動を展開している博物館には、モチベーションの高い職員の存在を確認することができます。学校教育や生涯学習への対応、緊縮財政を背景に求められる効率的な経営、来館者本位の運営、さらには地域活性化の拠点としての役割等、多くの課題が課せられている現在の博物館であるからこそ、今後はますます博物館を支え、リードする人材がクローズアップされていくに違いないと考えています。

國學院大學は、学芸員養成課程を有する全国 300 余の大学の中でも屈指の伝統と充実したカリキュラムを誇っています。また、我が国初の大学院における博物館学コースを設置する等、現在の大学・大学院における学芸員養成の先頭に立っていると言って過言ではありません。現在、文部科学省を中心に大学における学芸員養成課程の充実が検討されていますが、樋口清之先生、加藤有次先生の理念を継承し、基礎となることを大切にしながらも、他の大学に先んじて進取の気風に富んだ充実したカリキュラムを さらに提供し続けて欲しいと願っています。

現在は、変化の激しい時代であり、博物館を取り 巻く環境も例外ではありません。私の部署には、毎 月 2,000 件以上の博物館情報が掲載された新聞記事 (全国紙・地方紙・専門紙)が届きます。こうした 数多くの情報に接するたびに「不易(時代が変わっ ても衰えないこと)」と「流行(一時的に急速な勢いで社会に広まること)」の両面を強く意識します。 博物館の必要性や博物館が収蔵する資料の価値はた とえ時代が移り変わろうとも簡単に変わるものでは ないと思いますが、一方で、時代の変化や利用者の ニーズに博物館(職員)が対応することも必要です。 これからの博物館には「不易」と「流行」のバラン ス感覚を持った学芸員がふさわしいと考えます。ま た、こうした人材を育成するのは両者のバランスが とれた我が母校・國學院大學であると信じています。



丹青研究所「ミュージアムライブラリー」における作業風景



情報誌「ミュージアム・データ」

「みはるかすもの」

大正大学教授 安藤孝一(あんどう こういち) 73期史: 75期博前史: 78期博後史

院友学芸員 昭和 42 年 8 月、文部省文化財保護委員会最後の研究職として任官された。最後のとは、翌年内局の文化局と合併して、外局文化庁が発足したからである。当時文化財保護委員会には、まだ旧内務省国宝調査室時代の人達が在職されており、各地での調査の思い出話しを聞くことができた。特に大場磐雄先生が指導教授であったというと、先生をはじめ多くの院友先輩の話しを伺うことができた。

私が配属された美術工芸課には、書跡部門に近藤 善博、財津永次、山本信吉、工芸部門に廣井雄一の 院友各氏が。ほかの課にも記念物課の埋蔵文化財部 門に亀井正道、無形文化課の芸能部門に榎本由喜雄、 田中英機の各氏が。さらに分室のあった東京国立博 物館には工芸課に佐藤貫一、加島進、考古課に三木 文雄、野口義麿の各氏が在職していた。美術工芸課 での主な職務は、文化財行政でも特に美術工芸品の 国宝、重要文化財の指定調査と指定文化財の保存管 理である。主な仕事相手は都道府県、市町村の教育 委員会文化財担当者である。仕事先の多くは社寺、 博物館など。全国の神社や博物館、中・高等学校と 教育委員会にはどこにも院友が在職している。同じ 学舎であった話題、心安い、先輩、後輩で親身になっ てくれる。従って大変仕事が進めやすかった。22年 後、東京国立博物館に異動したが、ここでも企画展 をはじめ、資料の貸借、調査、研究などに各機関の 院友にお世話になり、協力をいただいた。職場の上 司から「石を投げれば考古学者に当たる」と揶揄さ れた時、ふと思ったのは、院友学芸員はそれ以上だ ぞと、世間で言う学閥などは疾つくに超越している。 全国どこにでも院友学芸員が居て院友でなければ学 芸員でないくらいに。伝統的な学風「日本の古典文 化は國學院」と言う定評をより確実なものにして行 こうではありませんか。

大学博物館 平成13年から大正大学に奉職することになった。ここにも院友先輩の足跡があった。文学部史学科に高柳光寿、斉木一馬教授が居られた後、現職で黒川高明教授、いずれも東京大学史学編纂所からの異動である。本学は天台、真言(豊山・智山)浄土の三大宗派の設立なる大学で、多くの卒



業生が仏教界で活躍している。文化庁、博物館で仕 事上の付き合いのあった諸寺院の方々が、あの人も、 この人も、本学出身であったのかと、ここでも人の つながり、えにしを感じた。博物館学の学外実習は、 これらの方々にお願いして実施している。東は中尊 寺、輪王寺、西は平等院、長谷寺など。いま大学は、 創立記念事業の一環で博物館施設の準備が始められ た。本学には重要文化財・木造阿弥陀如来挫創(礼 拝堂本尊)をはじめとする仏教、歴史関係資料が数 多く収蔵されている。これらの資料は、これまで実 践資料として講義などに平常使われてきたもので、 特に展示公開施設の必要はなかったようである。し かし、近年史学科が歴史文化学科に改められ文化財 専攻が設けられた。これまでの研究史、資料として 扱ってきたものを、文化財としての保存管理や活用、 その取扱いを体験しなければならなくなった。いま 博物館施設開館に望まれることは、各宗派の設立に なる本学が広く仏教文化を中心とする文化遺産を調 査研究公開展示できる環境と立場にある。関係諸寺 院の所有する国宝・重要文化財など、ほんの僅かで も常時出品することができたら、学内活用のみでな く、地域(一般)社会に開かれた施設としても利用 できる。近世まで行われていた講や寺院の「出開帳」 平成版で、仏教理解への入り口にしても良いだろう。 いまこそが、大学博物館の社会的、学際的地位を高 め、仏教文化の殿堂として効験すべき時であろう。



実習授業風景(歴史資料の取り扱い)

埼玉県立川の博物館に勤めて

五十嵐 睦 (いがらし むつみ) 112期史・114期博前史

埼玉県立川の博物館は、平成20年4月より指定管理者制度 を適用し、運営の大部分を株式会社乃村工藝社が担っている。 私は、同社の契約社員として川の博物館の学芸業務に携わって いる。

指定管理者制度には否定的な意見も多く、実際多くの課題が山積している。ただ、川の博物館のこうした運営形態は端緒についたばかりであり、評価をするには時期尚早と言えよう。 重要なのは、埼玉県と乃村工藝社の両者において、博物館設立の意図を正しく理解し、その方向性を熟慮することと考えている。その上で、いかに来館者に伝えるべきことを伝え、かつ満足いただき、また来たいという思いを喚起するかについて考え、実践していくかが大切であろう。

ところで、現在5名いる川の博物館の学芸員の中で、人文 系を専門とするのは私一人で、他の学芸員は自然系の諸分野を 専門としている。私は、こうした環境にあって初めて、明確な



目的のもとプログラムを構築・実践する、主に環境教育にかかわるインタープリテーション(Interpretation)について知り、考える機会を得た。現在、インタープリターという用語は自然系環境教育において多用され、人文系の分野ではなじみが薄い。インタープリターには様々な技術と、何より目的意識とが必要とされる。現在、私の専門とする考古学においては、解説はあくまで説明にとどまり、体験学習も目的を深く追求しないままに行われている場合が多い。そうした状況にあって、インタープリテーションという考え方や方法は、非常に示唆的であると思われる。

現在の日本において、地域博物館に勤める学芸員の業務内容は多岐にわたり、さらに先述のように博物館運営形態も複雑化している。そうした現況だからこそ、明確な目的意識のもと、一つ一つの事業に対峙する必要があるものと考えており、そうした活動を実践していきたい。

学芸員雑感

明石市立文化博物館学芸員 **國 井 綾**(くにい あや) 114期史:116期博前史

明石市立文化博物館は今から17年前、南に明石海峡を臨む、明石城に隣接する地に開館しました。明石市が運営して来た当館も昨今の例に漏れず、平成19年4月より、株式会社乃村工藝社が指定管理者としてその運営を担う運びとなりました。

私は学部では歴史学、大学院では博物館学を専攻し、青木 先生のご紹介によって、修士2年の12月より明石市立文化博 物館に勤務する事となりました。全くの未経験という事に加え、 当時修士論文の執筆も覚束ない状態であった私は、喜びの気持 ちを抱きながらも複雑な思いで西へ向かったのを覚えています。

指定管理者が運営する館の一学芸員として思う事は、「官から 民へ」の前に最優先事項として考える必要があるのは、博物館 という施設の性格上、資料の事ではないかという事です。年限 付きという当該制度。指定管理権の更新を迎える施設も多い中、 指定管理者 A が行った資料収集も、指定管理者 B の収集方針が 全く異なるものとなれば、系統だった資料収集も困難となるで しょう。資料あってこその博物館、という自明の理が、自明の 理として通らなくなっているのが現況と言えるかも知れません。

これから学芸員を目指す学生の皆様へ申し上げられる事が あるとすれば、学芸員には専門性と同時に、専門に拘り過ぎな いという面も時には求められる、という事かと思います。実務 に就いてみて、自らの学生時代の専攻だけで仕事をなさってい



る方は極僅かの様に感じますし、私も歴史学に博物館学という 専攻の身ながら、今は日本画の展覧会の仕事をしています。新 たな分野について勉強するのを厭わないという事も、学芸員に とって必要な要素のひとつと言えると思います。また、展覧会に 関わる方々との関係を丁寧に築くという事が必要不可欠だと痛感 します。例えば資料拝借の際。ふたつとない唯一無二の資料を他 人に託すという面を考えれば、信頼の置けぬ相手に貸し出したり 出来ないのは当然の事で、互いの信頼関係あってこそ実現すると 言えましょう。これらは分りやすい例でしか有りませんが、仕事 上関わる方々との関係構築が最重要と言えると思います。

思う所を雑駁に述べさせて頂きましたが、まだまだ新米かつ浅学の身。先生方、諸先輩方のご指導を仰ぎながら丁寧な仕事をして行ければと願っております。



明石市立文化博物館

学芸員への道程 - 9回目の挑戦にして-

新潟県立歴史博物館研究員 大楽和正(だいらく かずまさ) 111 期文 · 113 期博前文

平成20年5月から新潟県立歴史博物館に採用され、現在は 学芸課研究員(民俗担当)として勤務しています。私の場合、 大学院修了から採用されるまで3年1ヶ月かかったわけです が、採用試験9回目の挑戦にしての合格でした。

民俗担当の募集は、考古学や歴史学などに比べると募集数が極端に少ない状況にあります。そのため、受験する地域を限定していては、学芸員になることは難しいと思い、試験があるところは地域を選ばず受験しました。当然旅費の出費は厳しいものでしたが、試験を重ねることにより、後半は自分の弱点を克服しながら試験に臨めたことが合格へ結びついたのだと思っています。学芸員を目指す皆さんへ一言アドバイスしたいのは、昨今の学芸員就職を取り巻く厳しい状勢において、専門試験対策のみでは合格を手にすることは難しいということです。そのため、私も試験の後半では、毎日ノルマを決めて数的処理の問題集を解き、これまで受けた面接の質問内容から自分なりの面接シートも作成しました。



また、私のように何度も不合格通知を受け取ると、さすが に精神的に追いつめられてきます。周囲の友人たちが学校教員 や有名企業などへ立派に就職していく姿をみると、自分はいつ になったら正規職員になれるのか。これだけ落ちるのであれば、 自分は学芸員に不向きではないのかと考え込むことも何度とな くありました。

そんなとき支えになったのが先輩の院友学芸員の方々の活躍する姿でした。学生時代から院友の先輩が勤務する都内の博物館で仕事をさせていただき、ここでの経験は現在の仕事でも大きな支えとなっています。私の場合、このような目標とする院友学芸員が身近にいたからこそ、最後まで諦めずに頑張れたのかもしれません。あの尊敬する院友学芸員に少しでも近づけるよう日々研鑚を積んでいきたいと思います。

学芸員への道程 - 学芸員を目指す皆様へ-

静岡アートギャラリー嘱託学芸担当 大石 沙織 (おおいし さおり) 116期史

静岡アートギャラリー、学芸担当の大石沙織です。2008年3月に國學院大學文学部史学科を卒業し、同年4月より勤務しております。新任の学芸員(私の場合は学芸担当となりますが)の体験談と言うことで、私の体験などでは些末なものかとは存じますが、私なりに精一杯書かせていただきたく思います。静岡アートギャラリーは市より指定管理者の指定を受けて静岡市文化振興財団が運営する博物館相当施設です。駅の目の前という好立地にありビルの中にある「都市型美術館」として存在しており、「心豊かな生活を彩る美」に焦点をあてた様々なジャンルの展覧会を開催しております。

さて私がどうやってなったかですが、恥ずかしながら募集 されないうちから電話をかけてみたり、図々しくも青木教授に 推薦状を書いていただいたりと、通常の就職活動はせずに博物 館への就職に焦点を絞って来たわけです。そのお陰で今ここに いるわけですが、まだ数ヶ月ではありますが私の経験を申し上 げますと、「何でもやる」この一言に尽きると思います。学芸 員と言うと確かに専門性を求められますが、多くの展覧会を行 う上で幅広い知識も必要であり、職務も学芸から施設運営のた



めの庶務まで実に多彩です。また随時ミュージアム教室を募集 していることから、多くの人と関わりを持ち、実際勤務1ヶ月 にして広報やミュージアム教室をおこなったりしました。そし て多くのことを体験するのはよりよい施設運営を職員皆で考え ていく上で重要なことであり、必要なことだと感じます。私に とって美術館は毎日が勉強の場であり、先輩方に色々な事を教 わりながら充実した毎日を過ごしています。

私自身まだまだ勉強不足でありこのような場で申し上げる のは恐縮ですが、私の体験が少しでもお役に立てるなら幸いに 思います。



教員紹介

博物館実習Ⅱ担当 樋 口 政 則 (ひぐち まさのり) 83期史



文字は「記号化された言語」だと思う。文字は言語があってこそ生み出された。文字を読むには、言語を知らなくてはならないし、言語によって形成された文化を理解する必要がある。博物館で扱う文字資料は、そういう過去の言語活動の所産であり、人類発展の軌跡だと思う。

博物館実習 Ⅱ は、日本の文字資料をテーマとしている。博物館の活動には文字資料の取り扱いが不可欠だからである。講義では、金属・石材・木材・絹地・紙といった資料の性質と成り立ちを探り、なぜそこに文字があるのかを問い、そこに固定された言葉を紹介している。それは、文字資料を目の前にしたとき、何をすべきか、何をしてはならないかという基本から、博物館諸活動に文字資料を生かす方法を身につける土台となるものである。

読めなければ、文字は単なる図案にすぎない。学生の希望に応じ、短い時間であるが、講義テーマの理解を 深め、専門的力量を養うため、読解実習もおこなっている。

講義の全体を通して、博物館にとって「文字とは何か」を、学生とともに考えてみたいと思っている。

國學院大學博物館学教員紹介

青木豊 (國學院大學)	矢島國雄	鷹野光行	原田一敏
資料保存展示論研究	博物館学研究Ⅰ・Ⅱ	博物館学総論	美術工芸資料論特論 I
博物館概論 博物館実習Ⅲ·Ⅳ			
博物館資料論Ⅰ・Ⅲ	明治大学	お茶の水女子大学	東京国立博物館
石田武久	高橋信裕	樋口政則	山田磯夫
博物館実習 I · IV	社会視聴覚教育Ⅱ	博物館実習 Ⅱ	博物館資料論Ⅱ
博物館概論 儀礼文化学会	文化環境研究所	江戸川区郷土資料室	横浜美術短期大学
杉山正司	落合知子	内川隆志	桝渕規彰
博物館経営論	博物館実習 IV	博物館実習I	博物館資料論Ⅱ
埼玉県立歴史と民俗の博物館	全博協事務局幹事	國學院大學	神奈川県教育委員会
粕谷崇	下湯直樹		
博物館情報論			
白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	博物館学研究室助手		

※大学院授業、学部授業

〔博物館学課程開講講座表〕

	授業科目	単位数	1年次	2年次	3年次	4年次	備考
必修科目 (23単位)	生涯学習概論Ⅱ	2		半期			
	博物館概論	2		半期			
	博物館経営論	2			半期		
	博物館資料論I	2			半期		
	博物館資料論Ⅱ	2		半期			
	博物館資料論Ⅲ	2			半期		
	博物館情報論	2			半期		
	博物館実習I	3		半期			
	博物館実習Ⅱ			半期			
	博物館実習Ⅲ				実地見学		
	博物館実習Ⅳ					通年	
	視聴覚教育メディア論	2			半期		「社会視聴覚教育Ⅱ」を受講すること
	人間と教育	2	半期				
	教育と社会	2	半期				

Q&A

学芸員に関する質問

- Q 学芸員とはなんですか?
- A 博物館に勤務する専門的職員で、学部卒業と同時に取得できる国家資格です。
- Q 何年生から「学芸員資格に関する科目 | の履修はできますか?
- A 履修登録は2年生からです。希望者は、学部2年生の4月のガイダンスに出席し、履修登録をすることが必要です。
- Q 実習はどのように行われますか?
- A 本学は、大学付属博物館を有するため、大学内で実習が受講できます。
- Q 卒業生で学芸員になった人はどれくらいいますか?
- A 全国の大学で最も多く、現在までに約1,000名の卒業生が学芸員として活躍しています。
- Q 大学卒業後も、さらに勉強を続けたい時はどうしたらいいのですか?
- A 國學院大学では、大学院に我が国初めての博物館学コースを設け、その修了者の多くが 博物館に就職しています。

國學院大學

院友学芸員 No.2

発行日 平成21年3月31日

発行所 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學博物館学研究室